



NEW YORK STANDARDS QUARTET

Tim Armacost
David Berkman
Gene Jackson
Daiki Yasukagawa

ティム・アマコスト
デイヴィッド・バークマン
ジーン・ジャクソン
安カ川大樹



BIOGRAPHY

ニューヨーク・スタンダード・カルテット (NYSQ)結成時、そのコンセプトはジャズの名曲を自分達流に演るという単純明解なものだった。長年オリジナルを中心にプレイしてきたメンバー（全員が作曲を手がけ、各自リーダーとして自らの楽曲を演奏するバンドを率いていた）が、若い頃から慣れ親しんできたもっとシンプルなスタンダードナンバーの演奏に面白さと開放感を感じたのである。「コンファメーション」や「オール・ザ・シングス・ユー・アー」などのジャズの名曲をプレイすること...それは曲自体に重きを置くのではなく、どのようにアプローチするかという楽曲の演奏自体が焦点となる。スタンダードナンバーは、自由で多様な解釈が許される真っ白なキャンバスのようなもの。次第にそのアプローチをスタンダードのアレンジや再構築へ広げるとともにスタンダードのフォームやハーモニーと密接な繋がりを持つオリジナル楽曲も手がけるようになっていった。

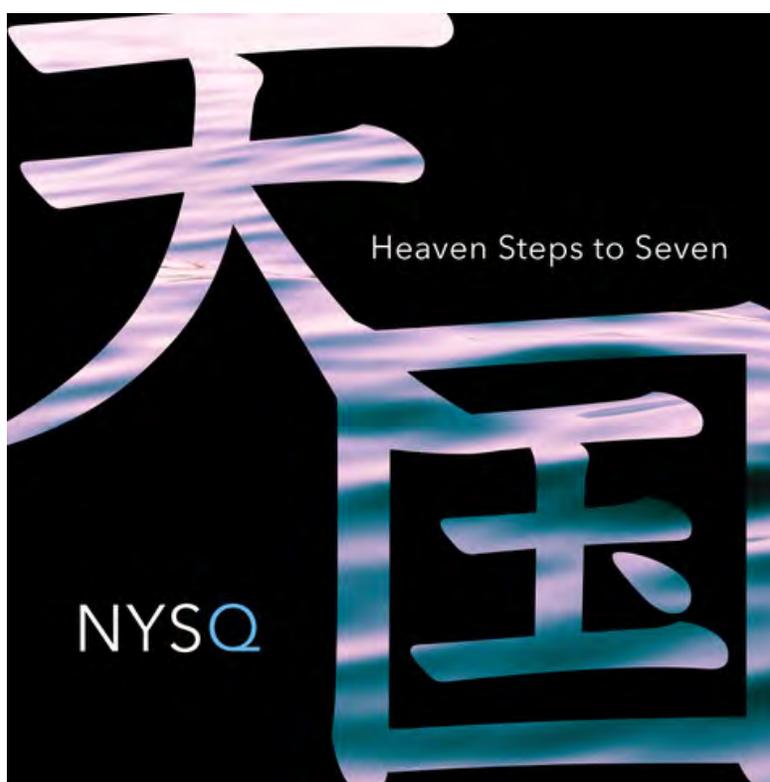
バンドがツアーを始めて12年になるが、その成長の軌跡は音楽の中に見てとることができる。聴衆からは絶大な賞賛を受け、世界中のフェスティバルやジャズクラブからの出演依頼が絶え間なく舞い込んでいる。ニューヨーク・スタンダード・カルテット (NYSQ)のメンバーは、サクソとフルートのティム・アマコスト(ビリー・ハート、レイ・ドラモンド、ケニー・バロンらと過去に共演)、ピアノのデイヴィッド・バークマン(トム・ハレル、セシル・マクビー、ヴァンガード・オーケストラ)、ドラムのジーン・ジャクソン(ハービー・ハンコック、ウェイン・ショーター、デイヴ・ホランド)、ベースの安カ川大樹(日本ジャズベース界の第一人者)である。このコラボレーションによるグループは、日本で全国ツアーを12回、欧州ツアーを2回、ニューヨークを始めとする全米各地でも複数のツアーを行っている。グループはこれまでにチャレンジ・レコード(オランダ)とダイキムジカ(日本)からCDをリリースし、2014年にワールウィンド・レコーディングスと契約。同レーベルからリリースした「ザ・ニュー・ストレート・アヘッド」は、翌2015年に批評家からの絶賛を浴びた。バンド結成10周年を記念して発売された「パワー・オブ・10」に続く最新作「スライト・オブ・ハンド」はワールウィンドでの3作目、バンドとしては通算6作目となる。

NEW YORK STANDARDS QUARTET

RECORDINGS

October 1st, 2018 Release on
CD and LP

Heaven Steps to Seven



ニューヨーク・スタンダーズ・クアルテット 『Heaven Steps to Seven』 現代ジャズのフィルターを通してオールド・スタンダードを再構築する

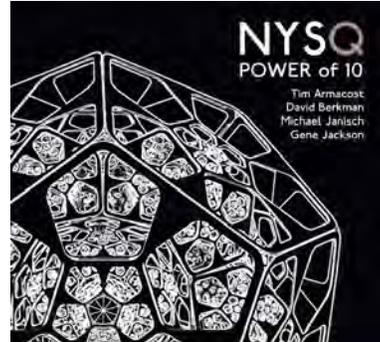
NEW YORK STANDARDS QUARTET

RECORDINGS



Sleight of Hand

2017



Power of 10

2016



The New Straight Ahead

2014



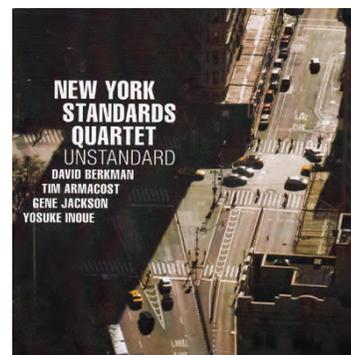
Live at Lifetime

2013



Live In Tokyo

2008

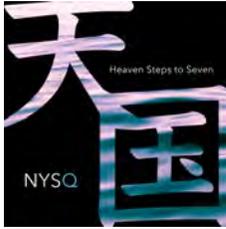


UnStandard

2011



PRESS



オールド・スタンダードを現代ジャズのフィルターを通して再構築するNYSQ

ニューヨーク・ジャズ・スタンダードズ・クアルテットは、2006年に中堅プレイヤーのデヴィッド・バークマン（ピアノ）とティム・アマコスト（テナー・サクソ、ソプラノサクソ）を中心に、2004年までニューヨークで活躍していた井

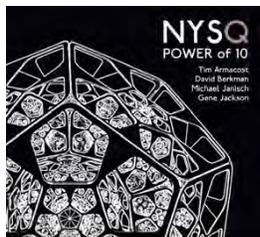
上陽介（ベース）、91年から2000年にかけてハービー・ハンコック（ピアノ、キーボード）のグループに参加し、現在は東京を拠点に活動するジーン・ジャクソン（ドラムス）の4人で結成された。コンテンポラリー・ジャズの視点から、オールド・スタンダードに新たな命を吹き込み、またスタンダードのコード進行を借用して、新たなオリジナルを生み出して、独自のスタイルを構築してきた。バークマンとジャクソンは夫人が日本人、アマコストは、元駐日大使の父を持ち、父の赴任に伴い早稲田大学で学び日本語は堪能、禅宗にも造詣が深いという親日家であり、結成と同時に日本全国を巡るツアーを展開してきた。前作の『ザ・ニュー・ストレート・アヘッド』からはイギリスのWhirlwind Recordingsと契約、7作目の本作ではアメリカでの活動のレギュラー・ベーシストのウゴナ・オケグワが起用された。また、初のLPレコードのリリースとなった。

マイルス・デイヴィス（トランペット）のプレイで知られる“セヴン・ステップス・トゥ・ヘヴン”のもじりである本作のタイトルを冠したコード進行を借用した

オリジナルが収録されるかと思いきや、その予想は見事に裏切られた。全曲ジャズ・ジャイアンツが数多の名演を遺したスタンダードで固められる。筆者は、滞米中にこのアルバムのレコーディング・セッションを撮影した。リラックスした雰囲気の中でも、けっしてジャム・セッションのような冗長さに陥ることなく、

結成13年の信頼関係による緊密なインタープレイと、ツボを押さえたアレンジが、オールド・ジャズの持つ素晴らしさを、コンテンポラリー・ジャズのフィルターを通して雄弁に語られている。夏のアルバム・リリース日本ツアーに期待は高まる。

PRESS



2016年6月1日 常盤武彦

2005年から、日本でも精力的にツアーを展開しているニューヨーク・スタンダーズ・クアルテットが結成10周年を迎え、記念作『Power of 10』をリリースした。2008年にNHKでのライヴ録音を収録した『Live in Tokyo』から通算5作目となる。日本人を妻に持つデヴィッド・バークマン (p) と、アマコスト元駐日大使の子息で、早稲田大学で青春時代を過ごし、禅など日本文化に深い関心を寄せるティム・アマコスト (ts,ss)、バークマンと同じく日本人の妻を娶り、東京に拠点を置くジーン・ジャクソン (ds) ら結成当時のメンバーに、前作の安カ川大樹 (b) に替わりベースにマイケル・ジャニッシュ (b) を迎えて、10年目をセレブレイトした。

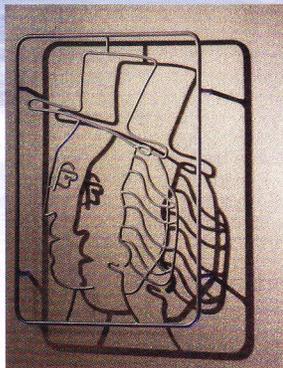
ジーン・ジャクソンは、ある日カー・ラジオでモダン・ジャズ・クアルテットの特集番組を聴いていた。その円熟のインター・プレイは、彼らが長年ツアーやレコーディングを共に過ごしてきたからと確信する。ニューヨーク・スタンダーズ・クアルテットの目指すところも、そのお互いを知り尽くしながら、さらに前進するアンサンブルを構築することである。彼らは、日本だけでなく、アメリカ、ヨーロッパのオーディエンスにも伝わるスタンダード曲を主要なレパートリーとしながら、けっして冗長なジャム・セッションに陥ることなく、ニューヨークのコンテンポラリー・ジャズ・テイストを加味しながら、タイトなインタープレイで相互を刺激しあいながら、オリジナル・サウンドを創造している。オリジナル曲も、かつてのビバップの巨匠達のように、スタンダード曲のコード進行を借用や、リハーモナイズしている。本作でも1曲目の“Deep High Wide Sky”は、“How Deep Is the Ocean”の借用で、種明かしをするように2曲目にバークマンとアマコストのデュオで収録されている。また“Lush Life”のあとにはバークマンのピアノ・ソロの小品“Lush Effect”、“On Green Dolphin Street”をモチーフにしてバークマンのソロの“Doll's Phone Cause”をイントロにして、アマコスト作曲の“Green Doll's Phone”、“Secret Love”からは、ジャニッシュのソロの“Secret Fondness”から、バークマンの“Hidden Fondness”と、ユーモラスに繋ぎながら、演奏は同じコード進行で、曲のテクスチャーの違いを際立たせている。エルヴィン・ジョーンズ (ds) & ジャズ・マシーンの長年のレパートリーだった“Three Card Molly”のカヴァーもスリリングだ。

JAZZ



ザ・ニュー・ストレート・アヘッド
New York Standards Quartet
[P-VINE PCD-93932]
7/15 発売

どんなときでもフレーズのアーティキュレーションが気持ちよく聴こえてくるベーシスト、というのがティム・アマコスト (ts) のNew York Standards Quartetでおなじみの安カ川大樹の僕の印象だ。彼がいるとどんなリズムも、どんな音楽も凛として聴こえてくる。たんにリズムの正確さだけでなせるわけではない。アーティキュレーションってそういうことだけじゃないよなっていつも感じさせてくれる。ちょっとひねりの利いたスタンダードのアレンジもばっちり、気持ちよく耳に入ります。通算4枚目となるNYSQの最新作、イイネ。
(高見一樹)



スタンダード・ソングに新たな生命を吹き込む、 人気ジャズ・クアルテットNYSQの東京公演

元駐日米国大使マイケル・ヘイデン・アマコストの子息で、30年ほど前に東京でプロ・キャリアを踏み出したティム・アマコスト(ts,ss)、新主流派的な叙情溢れるスタイルで知られるデイヴィッド・パークマン(p)、現在は東京を拠点に活躍するジーン・ジャクソン(ds)ら親日派の3人と、日本を代表するベーシスト安カ川大樹をメンバーとするニューヨーク・スタンダード・クアルテットは、毎夏日本各地をツアーで周り、今年で12回目を迎えた。ツアーの終盤戦、東京・南青山『ボディ・アンド・ソウル』でのギグをお伝えしよう。

今年4月に最新アルバム『スライト・オブ・ハンド』をリリースしたNYSQ

ニューヨーク・スタンダード・クアルテット(以下、NYSQと略)は、ニューヨークを本拠に活躍する中堅ミュージシャン、デイヴィッド・パークマンとティム・アマコスト、ハービー・ハンコック(p)らとの共演で知られる実力派ジーン・ジャクソン、そして1991年から2004年まで、ニューヨークのファースト・コール・ベーシストのひとりとして活動した井上陽介(b)をメンバーに、2006年に結成された。同年から日本ツアーを敢行し、2013年発売のライブ・アルバム『ライブ・アット・ライフタイム(Live at Lifetime)』(2012年6月、静岡LIFETIMEでライブ収録)からベーシストを安カ川大樹にチェンジ、アンサンブルをタイトに進化させ、この数年は大規模なジャズ・フェスティバルにも出演するほどに評価を高めてきた。

コンテンポラリー・ジャズの視点からスタンダード・チューンを再解釈するユニットは数多いが、NYSQは結成からの12年間に6枚のアルバムをコンスタントにリリース。また日本、アメリカ、ヨーロッパをツアーで定期的に巡るなど、実り豊かな活動が12年も続いているのは、彼らが各国のジャズ・ファンから大きな支持を集めていることの証だろう。前々作の『ザ・ニュー・ストレート・アヘッド(The New Straight Ahead)』(2014年)からはイギリスのレーベルWhirlwind Recordingsと契約、ヨーロッパでの評価も高まってきた。今年4月には、2015年の来日時に山中湖のスタジオでレコーディングした最新作『スライト・オブ・ハンド(Sleight of Hand)』をリリースし、今回のツアーは、そのニュー・アルバムのお披露目公演ともなった。今年は京都、大阪、神戸、岡山、広島と周り、宮崎ではシーガイア・ジャズ・フェスティバルに参加、「大観衆から大きな拍手を浴び、感激した」と、結成時の12年前に想いを馳せて、アマコストは語った。

ジャズの伝統と革新が絶妙にブレンドされたNYSQサウンドが客席を魅了

熱帯夜が続いた7月28日、東京・南青山の『ボディ・アンド・ソウル』は、NYSQを長年



『Sleight of Hand』

New York Standards Quartet
Whirlwind Recordings WR4704 (海外盤)

●NYSQの最新作で、英 Whirlwind Recordingsレーベルからの第3弾。収録曲は「ソウル・アイズ」「アスク・ミー・ナウ」「イン・ア・センチメンタル・ムード」「スライト・オブ・ハンド」「アイ・フオール・イン・ラヴ・トゥー・イージーリー」「ディス・アイ・ディグ・オブ・ユー」「デトゥア・アヘッド」「ラヴァー・マン」の全8曲。

SET LIST

First Set

1. Sleight and Hand
2. Tonight
3. I Will Keep Loving
4. If I Should Lose You
5. NYSQ Theme

関連サイト

New York Standards Quartet
<http://nysq.org/home/>

Body & Soul
<http://www.bodyandsoul.co.jp/>



Tim Armacost

ティム・アマコスト(tenor, soprano saxophone)

David Berkman

デイヴィッド・パークマン(piano)



New York Standards Quartet

@ Body and Soul, Tokyo on July 28, 2017



オープニングは、ニュー・アルバムタイトル・チューンで、バークマンのオリジナル「スライト・オブ・ハンド」。バークマンの小粋なシングル・トーンとブロック・コードが、心地よい酔いへと導く。テナーへとソロがパスされると、アマコストが朝々とメロディを奏で、安カ川とジャクソンがスウィングーにサポートした。MCで、アマコストが「この曲の元になったコード進行は？」と客席に問う。ガーシュウィン兄弟の「バット・ノット・フォー・ミー」と正解を言い当てたのは、ボディ・アンド・ソウルの関京子ママだった。アマコストは、実は日本語に堪能で、禅宗にも傾倒している。猛暑の中、今回のツアーでも京都の寺院で座禅を組んで、いつかの安らぎを堪能したそうである。

続いてはレナード・バーンスタインが音楽を担当したミュージカル『ウェスト・サイド・ストーリー』からの「トゥナイト」。アマコストは、直訳で「西側物語」と紹介し、笑いを誘っ

た。2018年はバーンスタイン生誕100周年、青春時代の1930~40年代をジャズの勃興と共に過ごし、ルイ・アームストロング(tp,v.o)やデイヴ・ブルーベック(p)らとも共演したバーンスタインはジャズへの造詣の深さでも知られている。1957年の初演以来、今も繰り返しリヴァイヴァル上演され、今年7月には久々にブロードウェイ・キャストによる東京公演が開催されたこの不朽の名作の序盤で、若者たちの恋の予感を描いた「トゥナイト」を、アマコストが美しく歌い上げる。

リハーモナイズやトリッキーなアレンジを施すだけでなく、スタンダード・ソングを原曲に忠実にストレートなプレイで聴かせるのもNYSQの魅力だ。バラッドの「アイ・ウィル・キープ・ラヴィング・ユー」では、ジャクソンが絶妙なブラッシュ・ワークを聴か

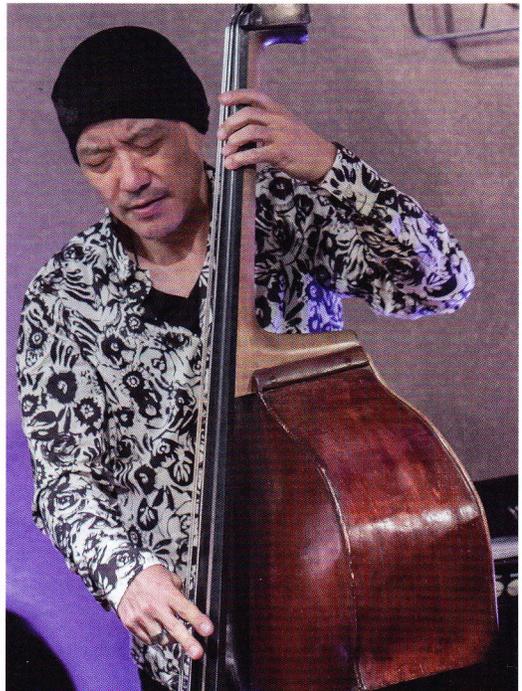
せ、安カ川がリリカルなベース・ソロを取る。続く「イフ・アイ・シュッド・ルーズ・ユー」では、一体となったインタープレイが炸裂した。ジャズの伝統と革新が絶妙にブレンドされたNYSQサウンドが客席を魅了する。エンディングは、ニューヨーク・ジャズのトラディションに則り、短い循環コード曲のバンド・テーマに乗せてメンバーを紹介し、セカンド・セットへの期待を盛り上げた。

彼らは今春にニューヨークで次回作をすでにレコーディング済みで、来春のリリースを予定しているという。日本と深い縁を持ち(バークマンの妻は女優の中島唱子、ジャクソンの妻も日本人)、日本の聴衆とともに成熟したとも言えるこの愛すべきグループが、新作を携えて、さらに成長した姿を見せてくれる来年夏が、今から待ち遠しい。 ■

Daiki Yasukagawa
安カ川大樹 (double bass)



Gene Jackson





NEW YORK STANDARDS QUARTET

GENE JACKSON

ジーン・ジャクソン／drums

ペンシルバニア州フィラデルフィア生まれ。1979年にバークリー音楽大学へ進学後、20代でケビン・ユーバンクスのバンドに参加。1987年に活動拠点をニューヨークに移すと同時にブレイクし1991年からハービー・ハンコック&ウェイン・ショーター・カルテット、1993年からはハービー・ハンコック・トリオおよびカルテットのメンバーとして世界中をツアー。あまりの過密スケジュールのため同時期所属していたデイブ・ホルランドのバンドを断念したというエピソードがある。その後もブランフォード・マルサリス、ダイアン・リーヴス、エルビス・コステロをはじめとする世界のトップアーティストと共演、数多くのレコーディングに参加している。また熱心な教育者として、ニューヨークのクイーンズカレッジなどの教育機関や米国のみならず世界各地でのクリニック、ワークショップでも指導にあたっている。同世代のドラマーの中で最も知名度が高く、誰からも愛されているドラマーである。



TIM ARMACOST

ティム・アマコスト / saxophones

ロサンゼルス生まれ。7歳よりフルートを始め、8歳からクラリネットも本格的に始める。15歳の時にテナー・サクソに転向し16歳より当時住んでいたワシントンのビッグバンドに参加、演奏活動に入る。1985年ロサンゼルスポモナ大学を卒業後、オランダアムステルダムに移住し、その懐の深い骨太のサウンドと抜群のリズム感で注目を浴び世界的に活動範囲を広げてゆく。1992年オランダのノース・シー・ジャズ・フェスティバルに出演。1993年にニューヨークへ移り、全米、ヨーロッパ、北欧等で活動。1995年モンタレー・ジャズ・フェスティバル、1998年オーストラリア・マンリー・ジャズ・フェスティバルに出演。これまでにケニー・バロン、トム・ハレル、ロイ・ハーグロブらとの共演歴があり、またリーダーとして発表したレコード8作はいずれも高い評価を受けている。ウイントン・マルサリス率いるジャズ・アット・リンカーンセンター・オーケストラへの楽曲提供、日米欧各地の大学やジャズクリニックでの指導など演奏活動以外にもその活躍の場を広げている。5歳から1年間、8歳から2年間、そして20歳から2年間は早稲田大学の交換留学生として日本に住んだ経験を持ち、日本に対する造詣も深い。2015年にはグラミー賞ノミネートを受け、現在ニューヨークシーンで最もポピュラーなプレイヤーの一人として確固たる地位を築いている。



NEW YORK STANDARDS QUARTET

DAVID BERKMAN

デイヴィッド・バークマン／piano

8歳から出身地のクリーヴランドでピアノを始め、バークリー音楽大学とミシガン大学で学んだ後、故郷でミュージシャンとしての経験を積む。1985年にニューヨークに移り、トラディショナルジャズに対する豊富な知識と独特な現代的感性を兼ね備えたプレイで、現在はニューヨーク・ジャズシーンにおけるかけがえない存在となっている。ソニー・ステイット、セシル・マクビー、トム・ハレル、クリス・ポッターをはじめとする数多くのトッププレイヤーとの共演に加え、ヴィレッジヴァンガードオーケストラのピアニストもつとめる。デイヴィッド・バークマンのCD「ハンドメイド」は、ハービー・ハンコックらと並び1998年ジャズタイムマガジンのトップ5に選ばれ、リーダーとして発表したレコード7枚すべてが多くの批評家による年間最優秀作品リストに登場している。受賞歴のある作曲家、バンドリーダー、レコーディングアーティストの活動に加え著名なジャズの教育者としてニューヨークのクイーンズカレッジ、オランダの音楽大学、インディアナ大学など多くの教育機関で意欲的に後進の指導にあたっており、これまでに三冊のジャズ教本を出版している。



DAIKI YASUKAGAWA

安カ川大樹／bass

兵庫県西宮市出身。幼少のころよりピアノを始め、明治大学入学後「ビッグ・サウンズ・ソサエティ・オーケストラ」入部を機に、コントラバスをはじめめる。牧島克彦氏、古野弘志氏、吉田秀氏に師事。1989年「第19回山野ビッグバンドコンテスト」にて最優秀賞受賞。1991年プロ活動を開始する。1996-97年にはマリーナ・ショー(vo)の全国ツアーに参加。その力強いベースのサウンドは日本発のレコーディングに欠かせない存在となり、アジアをツアーする国際的なミュージシャンからツアーやレコーディングのリクエストも多く、エディ・ヘンダーソン、日野元彦、デイブ・ピエトロをはじめとする数多くのミュージシャンと共演経験がある。その一方でソロアルバム「レット・マイ・ティアーズ・シング」を含むリーダーとしてのプロジェクトも高い評価を受けている。2009年、昭和音楽大学ジャズ科講師に就任。2010年11月にはリーダートリオで台中ジャズフェスに招聘され、2万人の観衆のスタンディングオベーションを受ける。2012、13、14年と3年連続で自己のレーベルアーティストのイベント「ダイキムジカ祭り」を開催。ジャズライフ誌等に絶賛される。2012、13年 ジャズページのベーシスト部門 2年連続第一位。今最も注目のベーシストである。

NEW YORK STANDARDS QUARTET



Tim Armacost, David Berkman, Gene Jackson, Daiki Yasukagawa
ティム・アマコスト, デイヴィッド・パークマン, ジーン・ジャクソン, 安カ川大樹